

基礎研 レター

介護サービス実践現場の今 —求められる介護サービスの多機能化とは

生活研究部門 准主任研究員 山梨 恵子
(03)3512-1818 yamanasi@nli-research.co.jp

五月半ば。石川県への出張の合間を縫って、小規模多機能型居宅介護と認知症デイサービスの2つの介護サービスを見学させていただいた。両サービスは、介護保険サービスの中でも市町村により事業者の指定や監督が行われる「地域密着型サービス」に位置づけられている。今後増加が見込まれる認知症高齢者や中重度の要介護高齢者等が、出来る限り住み慣れた地域での生活が継続できるようにと、平成18年度に創設されたサービス類型である。従来よりも市町村行政の裁量権が大きく、よりきめ細かい利用者ニーズへの対応が期待されている。今回の見学を通じて、地域の高齢者の暮らしをあたためる眼差しで支える実践現場の取り組みを垣間見た。

1——小規模多機能ホーム「はしたて」

加賀市橋立町は、江戸時代から明治時代にかけて、北前船の拠点として栄えた橋立港がある街である。小規模多機能ホーム「はしたて」に到着するやいなや、誘われるままに配食サービスのお弁当配りに同行させていただいた。

「こんにちは～」

「吉田さん（仮名）おる～？」

「お弁当を持ってきましたよ～」



小規模多機能ホーム「はしたて」の内部

「はしたて」の管理者西さんが玄関先から呼びかけると、八十代後半の女性と思われる吉田さんが、大きなマスクをつけたまま奥から出てこられた。数日前、吉田さんは転倒した勢いで顎を打ってしまわれたそうで、マスクの下には顎全体を覆うほどの大きな湿布が貼られていた。西さんはケガの様子

を気遣いながら、「今日はね、ちょっと東京からお客さん連れてきたわ」と、親しさが滲み出る語りかけで我々を紹介してくださった。

「あらあ。ごくろうさまです。」と快く玄関の中に迎え入れていただき、下駄箱の上にセンス良く飾られてあるお手製の手芸作品をあれこれと見せていただいた。まつぼっくりや、ちり緬を使った作品は、どれもが精巧なつくりで可愛い。

「はしたて」のお弁当は美味しいですか」という問いかけに、「毎日、喜んでいただいていますよ」と笑顔の吉田さん。おかずが多くて食べきれない時は冷蔵庫に入れておき、夕食の時にもレンジでチンして食べているそうだ。「レンジ、あわてると転ぶさけね。気をつけてせんといかんよ。」と、西さんが親身に言葉をかける。



お弁当の配達風景



配達先の玄関で利用者と語らう西さん

「はしたて」がお弁当を届ける高齢者は全部で8人。日によって人数は変わるが、毎日利用している人もいる。また、利用者は、小規模多機能ホームの登録者（要介護認定者）だけとは限らず、吉田さんのように介護保険を使わずに自立して暮らす独居の方も含まれる。もし、事業所が介護保険サービスとしての役割や機能だけを考えるのであれば、自ずと支援対象は要介護認定者に限定されていたことだろう。しかし、「はしたて」は、小規模多機能ホームが地域に存在する意義や役割から支援のあり方を考えていた。『高齢者の住み慣れた地域での暮らしを支える』という仕事を担ってゆくためには、要介護状態になる前からの関わりを大切にするべきとの考え方が、小規模多機能ホーム「はしたて」の支援の幅を拡げさせている。配食サービスを利用しているお年寄りも、お弁当とともにやってくる配達職員との束の間の会話を心待ちにしている、おしゃべりが止まらなくなることもあるという。

移動中の車の中で聞かせていただいた話。それは、配食サービスに取り組んでいる真のねらいである。買い物ひとつをとっても不自由な事が多い高齢者にとって、栄養バランスのとれた弁当が安定的に届けられるしくみは生活支援の基本になる。しかし、それ以上に大切なことは、高齢者や地域住民と関わる場面を少しでも増やし、「地域に埋もれている多様なニーズを発見することだ」と西さんは語る。

効率を追求する社会の変化は、必ずしも高齢者にとっての『暮らしやすさ』とは一致しない。バスの路線廃止、役所手続きのシステム化、家電製品の進化……。新しく便利になった家具やトイレの使い方に至るまで、暮らしの中で高齢者が戸惑う場面は様々に増えている。こうした社会の変化そのも

のが理由となって、高齢者の自立した暮らしを奪ってしまうこともあるという。その人が直面している、“生活の中の躓き”^{つまづき}が何なのかに気づき、その些細な困りごとを早めに取り除いてゆくこと。時には、その人の「〇〇がしたい」という気持ちに添ってゆくこと。それこそが、本当の意味での介護予防になるという思いが伝わってくる。

自分らしい暮らしを貫くために高齢者が求めている支援は、事業所の中で待っているだけでは分からない。お弁当の配達は、その個別のニーズを拾い上げてゆくための大切な接点だ。一食 350 円で提供していたお弁当は、行政からの補助金が打ち切られた今年四月に 50 円の値上げに踏みきった。それでも採算をとることは難しいが、趣旨を理解してくれる地域住民が有償ボランティアとして事業を支えている。

2——デイサービス「やたの」

もう 1 つの訪問先は、小松市矢田野町にある「デイサービスやたの」である。

のどかな田園風景の中にある事業所は、平成 23 年 5 月に認知症デイサービスとして開設された。木造平屋建ての趣のある建物は、元々料亭だった店舗を改装したものだ。田植え直後の水田を左手に見ながら、奥にある入り口へと進む。中に入ると、店舗として使われていた頃の雰囲気そのまま残した、厚さ 15 センチはある一枚板のカウンターが室内の中心に据えつけられたままになっている。カウンターの椅子、頭上ライト、小上りの座敷も、あえて手を加えずに再利用。小上り部分の窓から見える水田の景色が、居心地の良さを演出している。

床や浴室、トイレなどはデイサービス仕様に仕上げられているものの、通常のデイサービスにありがちな、室内の飾りつけや壁の張り紙は一切ない。「通常のデイサービスの雰囲気を全て取り払い、小洒落た店の雰囲気づくりを目指しました」と管理者の田中さん。「デイサービスやたの」は男性の利用者も比較的多いという。一人で静かに過ごしたい利用者が、カウンター席で陣取る姿がさまになるのも、デイサービスのコンセプトを「店」に見立てた、カウンターマジックの 1 つであろう。

デイサービスで過ごす利用者は、思い思いの時間に入浴をしたり、歓談したり、テレビを見たりしながらゆったりとした時間を過ごす。レクリエーションやトレーニング的な活動を行うことはほとんど無く、どこかのデイサービスでも設定している利用時間の制限もない。個別の人の生活状況に応じて、それぞれが必要な時に、必要な時間だけ過ごして帰るのが、「デイサービスやたの」運営方針だ。



デイサービス「やたの」の外観と、料理屋の雰囲気がそのまま残る内部

カウンターの中では、女性の職員がデイサービス利用者と配食サービス利用者 25 人分の昼食づくりを一手に引き受けていた。手際よく作っている今日の献立は、クリームシチュー、人参とタラコの炒めもの、大根サラダに果物はリンゴだ。職員は、カウンター席に座る男性利用者と会話しながら、気配り、目配りしながら料理を作る。その雰囲気は、さながら居酒屋のおかみさんと常連さんという表現がぴったりである。

事業所の家賃は 5 万円。ここが料亭だった頃、時々利用していた理事長の岩尾氏が、店を閉めるといふ店主の話を聞いてデイサービスへの転用を思いついたという。「いろいろな物件をちまちま探してきては、居心地の良い場所に作り替えてゆくのが好きなんです。」と岩尾理事長。街の中には、地域住人が長年にわって慣れ親しんできた様々な建物がある。その建物は、新築では決して出すことの出来ない独特の雰囲気と安心感を与えてくれるという。

現在、全国の一般デイサービス利用者は 156.7 万人（うち予防 40.8 万人）、認知症対応型デイサービス利用者は 6.7 万人（うち予防 0.9 万人）となっている¹。その中には、たとえ本人は不本意であっても、ケアプランにそって、『通わなければならない場所』となっているケースが少なくないのも現状だ。デイサービスへの通所を拒む理由は、集団処遇への抵抗感や利用者や職員との人間関係など様々であろうが、もしも街中に、ヘルスセンター感覚で使えるデイサービスや、「やたの」のような寄り合い場的デイサービスが増えたら、利用する高齢者にとっての魅力的な場所になるかもしれない。



カウンター内で昼食の準備をする職員

3—おわりに—地域高齢者ニーズを掴む

今回の見学では、小規模多機能居宅介護サービスと認知症デイサービスの 2 つのサービスを見せていただいた。介護保険制度上、両サービスは報酬体系、サービス機能ともに異なる整理がなされている。しかし、「個別高齢者の生活を地域の中で支えていく」という基本姿勢は、なんら変わるものではなく、それを実現するために、制度やしくみを超えた柔軟な発想と多様な支援で地域高齢者の暮らしを支えようとしている共通点がある。その柔軟性や多様性とは、小規模多機能型居宅介護の説明にありがちな、「通い」「泊まり」「訪問」といった杓子定規な機能の組み合わせなどではなく、個別の人と

¹ 厚生労働省 介護給付費実態調査月報（平成 25 年度 2 月審査分）

の関わりから引き出されるニーズへの対応にほかならない。そして、制度の隙間を埋めることのできる、柔軟かつ多様性を持った支援とはつまり、「ご近所さん」的なまなざしを持ち合わせた支えだ。

「制度やしくみを超えていかないと、お年寄りの生活支援なんて出来ないと思う。」

力強く言い切った「はしたて」の管理者西さんの言葉には、高齢者の暮らしをまるごと支える地域介護拠点の醍醐味と頼もしさが感じられた。

お風呂にさえ入れれば……。買い物の心配さえなければ……。火の始末さえ心配なければ……。そのひとつひとつの困りごとを高齢者本人と専門職とが一緒に考えながら、支援につなげてゆくこと。その取り組みがあつてこそ、地域包括ケアが目指す「地域生活の継続」につながってゆくのだろう。逆に、そのたった一つの困りごとを解決するために、高齢者の居場所を別の場所に移してしまえば、慣れ親しんだその人自身の暮らしや地域社会との関わりを、全て失ってしまうことにもなりかねない。二つの事業所の取り組みには、今後、地域に根ざした介護拠点が、どのように進化してゆくべきかというメッセージが込められているようにも思えてくる。

(取材協力)

社会福祉法人共友会 小規模多機能ホーム「はしたて」

社会福祉法人共友会 デイサービス「やたの」